

でござれた。皇太子さまの次の世代の男子がまだお生まれでなかつた。1996年から10年半にわたり、侍従長として天皇陛下のおそばに仕えた渡辺允氏の著書『天皇家の執事』(文春文庫・2011年)の「後書き」に、こんな描写があります。

「振り返つてみると、私が

侍従長としてお仕えしていく期間のほとんどは、皇位繼承をめぐる問題が常に緊迫した課題として存在し続けていました。(中略) 天皇陛下の背負われた責任感の重みと、お悩みの深さは、我々には想像すら出来ないものだったと思います。そ

のにお悩みによつて、陛下は夜お寝みになれないこともありました。そのような陛下のご様子を心配なさつて

夜も眠れぬ天皇陛下の悩み、  
皇后陛下も心配  
京都産業大学名誉教授  
(日本法制史研究所所長)

天皇陛下の「生前譲位」は非常に柔軟なお考えだと  
思いますし、唐突な印象はありません。  
そもそも皇位繼承をめぐる



る問題について、天皇陛下は十数年前からずっと悩んでいます。

次なる問題として浮上したのが皇太子さまへの皇位繼承です。いまや皇太子さまも56歳、あと数年すれば60代に差しかかります。天皇陛下としては、「そろそろ身を引いて、皇太子を前面に出さないといけない。これ以上は先送りにできない」という段階まで來たのではないか。天皇、皇后両陛下、皇太子さま、秋篠宮さまの間でも、十分に議論がなされて、しっかりと心の準備ができるているのだと思う。

ですが、現行の皇室典範では退位することができない。だから健康なうちに間

2016.7.29

題提起し、政府や国会にきちんと対応してほしいということではないでしょうか。

問題提起という点で象徴的なのは12年、両陛下が80歳を前にして、自らの葬儀についての言及をされたこと。これまでの長い歴史を踏まえて「國民生活への影響を極力少なくしたい」とご意向を示されたことは非常に大きかった。これを受け、宮内庁は13年、江戸後期以来の土葬に代わって火葬を導入し、墓に当たる陵墓を縮小することを決めました。天皇陛下が自ら発言しなければ到底実現しなかつたことです。

『週刊朝日』 平成28年7月29日号 「「平成」は終わるのか—「生前退位」問題の核心 天皇陛下の「胸中」」